

## 研究成果報告②

### 通常の学級と通級による指導の学びの連続性の在り方 ー通級による指導の成果を通常の学級の指導に生かす方策ー

趣旨 説明	澤 田 真 弓	(国立特別支援教育総合研究所)
報 告	清水 潤・江田良市	(国立特別支援教育総合研究所)
シンポジスト	佐 藤 友 信 氏	(江戸川区立東葛西小学校長)
	笛 木 啓 介 氏	(大田区立大森第三中学校長)
	喜 多 好 一 氏	(江東区立豊洲北小学校長)
指定討論者	宮 崎 英 憲 氏	(東洋大学名誉教授)
司 会	武富博文・笹森洋樹	(国立特別支援教育総合研究所)

<趣旨説明> 澤田 真弓 (国立特別支援教育総合研究所)

研究代表の澤田が研究の趣旨説明を行った。まず、共生社会に向けたインクルーシブ教育のシステムの推進に関する国の動向や平成 29 年 3 月に公示された小学校学習指導要領、中学校学習指導要領に盛り込まれた特別支援教育に関する規定、小・中学校に在籍する支援の必要な児童生徒の実態等を踏まえて本研究の背景について説明した。そして、通常の学級と通級による指導の学びの連続性に焦点を当てた研究の意義と目的について説明し、参加者と共通理解を図った。

#### 【研究報告】

<調査報告>清水 潤 (国立特別支援教育総合研究所)

平成 28 年度に行った調査概要及び結果の一部を報告した。市区町村教育委員会を対象に行った調査では、通級による指導の担当者に求める専門性や通級による指導に係る研修の通常の学級担任の受講状況などについて報告した。通級による指導を受けている児童生徒の在籍している学校長への調査結果では、学校長が課題として捉えていることについて報告した。学級担任を対象に行った調査結果では、授業参観の必要性和参観の状況に関する結果を報告した。

<手引き書 報告>江田 良市 (国立特別支援教育総合研究所)

本手引き書のコンセプトである、①通常の学級担任(担当者)が主体的に活用できるもの、②通常の学級担任と通級による指導担当者とは、互いに連携・協働し、全校の支援体制が充実することに結びつくもの、③調査結果や訪問調査等にもとづいているもの、について説明した。また、実際のページを提示しながら、本手引き書が一年間の指導の流れに沿って展開されていることや本手引き書の活用方法などについて紹介した。

#### 【シンポジウム】

<発表 1>澤田 真弓 (国立特別支援教育総合研究所)

研究代表の澤田より、通常の学級と通級による指導の学びの連続性を実現するための6つの提言を以下の通り掲げ、2年間の研究を総括した。①情報交換・情報共有の方策の検討、②授業を見合う体制づくりと工夫、③学校全体の取組として展開、④地域のリソースの活用と連携、⑤研修の工夫、⑥校長のリーダーシップと教育委員会のバックアップ

<発表2>佐藤 友信氏（江戸川区立東葛西小学校長）

全国連合小学校長会を代表して佐藤氏からは、平成29年度に全国連合小学校長会特別支援教育委員会が毎年行っている調査結果のうち、①通常の学級に在籍する「発達障害のある児童、又はその疑いのある児童」の在籍状況、②教育的支援の方法、③今後必要な対応、等を中心に報告があった。調査結果を踏まえて、教職員の人材育成と人材配置の充実、通級指導体制の整備の必要性等について発表があった。さらに通級による指導と通常の学級の指導がつながることで、学級担任の専門的知識の習得、校内外のネットワークの強化、授業力の向上等が期待されることについても発表があった。

<発表3>笛木 啓介氏（大田区立大森第三中学校長）

全日本中学校長会を代表して笛木氏からは、平成28年度に全日本中学校長会生徒指導部が行った調査のうち、①個別の教育支援計画・個別の指導計画の作成状況、②教育的支援の方法、③困難を解決するための対応、④通級指導教室との連携状況、等を中心に報告があった。調査結果を踏まえて、他職種も含めた人的支援の充実や学級担任等が専門的な知識・技能等を習得するための機会を増やすことの必要性について発表があった。

<発表4>喜多好一氏（江東区立豊洲北小学校長）

全国特別支援学級設置学校長協会を代表して喜多氏から、平成28・29年度に全国特別支援学級設置学校長協会が行った調査のうち、①通級指導教室の現状と課題、②自立活動の指導に関する課題、等を中心に報告があった。調査結果等を踏まえ、通級指導教員の専門性向上、アセスメント・指導内容等を通常の学級担任と共有化、校長の専門性向上と通級指導教員に対する指導力の向上などの必要性について発表があった。

<指定討論>宮崎 英憲氏（東洋大学名誉教授）

指定討論者である宮崎氏から、各シンポジストに対して次のような質問が出された。

『澤田に対する質問と回答』

質問： 今回の報告で紹介されていなかった、訪問調査で得られた通級の指導を通常の学級の指導に生かしていく好事例の紹介をお願いしたい。

回答： 訪問調査で得られた事例は、7事例ある。主な内容としては、研修や研究活動を効果的

に組み込んでいた事例、学校研究を進める中で連携が築かれていった事例、連携のためのツールの活用、スクールカウンセラーなどの専門性の高いスタッフを活用した事例、日常の協働の中で短時間の効果的な連携を図っていく事例、相互の訪問を通じた連携の事例、情報共有の方法としてデータベース化を行った事例、連絡票の活用、訪問相談の活用などである。

なお各事例の詳細については、この後、研究所のホームページに公開する成果報告書をご覧いただきたい。

#### 『佐藤氏に対する質問と回答』

質問： 通級による指導を受けることが望ましいが、通級による指導を受けていない子供が半数いる現状について、組織としての対応策についてお聞かせいただきたい。

回答： 特別支援教育コーディネーターの役割を担う教員を複数化している。いざという時に、迅速に対応して観察・共有できるように組織化している。

授業を実際に見ることが大切だと思っている。公開期間を設けて教員、保護者が授業参観を行えるようにしている。

通級による指導の授業観察を校長自ら行い、指導力を分析して通級担当者に伝えている。通級担当者に求められる指導力は突き詰めていくと通常の学級の担任にも必要な力であり、ビジョンとして全教師に示して組織的に対応を図っている。そうすることで、通級に通っていない子供に対して、それぞれの在籍学級で取り組めることがあるのではないかと考えている。

#### 『笹木氏に対する質問と回答』

質問： 専門家との連携について、ご自身の所属校がある大田区が多職種連携の紹介をお願いしたい。

回答： 学校の様々な課題に対応する際、教員の力だけで対応する時代ではなくなっている。学校に協力していただける力を積極的に活用している最中である。

区内の不登校に対応するためのモデル校になっており、不登校に対応するコーディネーターを指名している。学校の中で不登校、特別支援教育、いじめ、生活指導それぞれに個別に担当者を集めて会議を行うのは、効率的ではない。不登校の中には、発達障害や発達障害傾向のある生徒もいる。校内の支援委員会を立ち上げて、週2日来校するスクールカウンセラーの勤務日に委員会を設定している。ここでは、不登校のコーディネーターを中心に、不登校・特別支援教育のことなどの情報共有をしながら、スクールカウンセラーから助言を得るようにしている。月に1回、支援会議を放課後に開催している。そこには、区のソーシャルスクールワーカーや、地域の主任児童委員の方や民生委員の会長に出席していただき、地域の情報も入れていただきながら、今後の対応を検討している。いろいろな知識を持っている方、機関との連携を図るノウハウをお持ちの方に入ってください。

で、学校全体が情報を共有しながら動きはじめていると感じている。不登校の改善も成果として出てきている。

#### 『喜多氏に対する質問と回答』

質問： 平成 21 年度に全国特別支援学級設置学校長協会と国立特別支援教育総合研究所が連携して行った、特別支援教育に携わる教師の資質に関する研究の紹介をお願いしたい。また連携を図るために参観が重要になると思われるが、参観の実施が困難である現場の課題解決に向けた方策についてお聞かせいただきたい。

回答： 平成 21 年度に全国特別支援学級設置学校長協会は、特別支援学級の担任の専門性について調査を行った。学校長は特別支援学級の担任に対して、まず特別支援教育に関する指導力・知見をもってほしいと思っていることがわかった。二つ目が、児童生徒、保護者、同僚と適切な関係がつけられること、三つ目が児童生徒、保護者に共感し、優しさをもって対応することが挙がっていた。

通級指導教室が設置されている学校の校長であるが、授業参観の開催が難しいという課題に対しては、まず学校長として学校経営計画に通級による指導を明確に示すとともに、保護者に対しても通級を丁寧に説明し、理解・啓発を図っている。また手引き書にも V T R を活用した例が紹介されているが、本校でも行っている。また、高学年の子供たちを実際に通級指導教室に連れて行って、指導の実際について説明を受けて通級による指導の理解を図ることも行っている。近隣の特別支援学校の教員を講師として招いて障害特性の理解や指導方法等について学び、通級による指導の理解を図るようにしている。

#### <まとめ>

宮崎氏から本研究について、ご助言をいただいた。

宮崎氏： 新小学校学習指導要領・中学校学習指導要領解説の各教科の部分で困難さに応じた手立て・配慮が具体的に書かれている。通級による指導だけでなく通常の学級での指導においても重要なヒントになっていく。各教科の特質に応じた見方・考え方を持って各教科の本質に迫る授業力、授業改善を進めていく必要があると感じている。そして、今回の研究は通級による学びを通常の学級の学びに生かすという考え方であり、そのことを念頭に置いて相互連携を図ることが重要になっていく。今回出された手引き書はストーリー性があって分かりやすくなっている。まず特別な支援が必要な子どもに対して、授業場面でどのようにしていくか手引き書を活用しながら校内で検討していくことで、通級による指導の充実と同時に、通常の学級の授業力の向上につなげていっていただきたい。